

## 編集後記

今巻は廣田康生先生の退職記念号である。廣田先生はエリア・スタディーズの講義を担当され、グローバリゼーションやトランスナショナル・コミュニティをご専門として、横浜、群馬県大泉、新宿の大久保エリアなどで長年にわたって調査研究を重ねてこられた。廣田先生は、社会学者 Robert E. Park の “In short, gentlemen, go get the seat of your pants dirty in real research.” というメッセージを体現されるフィールドワーカーである。廣田先生が社会学を去られることはなんとも寂しい限りだが、その教えはスタッフや学生に受け継がれていくだろう。他者との共生を私たちは研究対象とするだけでなく、現実としてこれから生きていかななくてはならない。廣田先生のお仕事は、その道標となることだろう。

社会学科でもグローバリゼーションがここ数年で急速に深化している。今年度は学部の留学生入試が前年に比べて2倍近い受験生を集めた。また、大学院でも留学生が活躍している。スタッフも、国内はもとより世界各地で研究活動を行い、国際学会や海外誌でその成果を発表している。社会学科は、さまざまな文化背景を持つ人々とともに切磋琢磨することによって、専門知識だけではなく、寛容な態度を身に着けることができる環境になっているといえる。

一方、文化的な差異には潜在的な側面もある。一見「同じ」文化を共有しているように見えても、じつはものの見方や感じ方が大きく異なることもある。たとえば、編集子のゼミを受講していたある学生は古い人間関係が根付いている地域の出身であり、「となり同士が400年ぐらい前から知り合い」だと教えてくれた。進学に際して上京した際に、近所づきあいのありかたが東京では地元と異なることにカルチャーショックを受けたそうである。東京と海外の大都市での生活しか知らない編集子

は、100年単位で展開される親密な近所づきあいというものに逆に驚かされた。ナショナルなアイデンティティが印刷資本主義によって成立した社会的な構築物であるということは、Benedict Anderson の『想像の共同体』の主題であり、研究者なら「頭ではわかっている」のだが、自文化のなかの文化的差異は、実際に出会うといつも新鮮である。

メディア研究者の Joshua Meyrowitz は、テレビが、人々の場所への帰属感を崩壊させたと主張し、*No Sense of Place* というタイトルの本を著した。スマートフォンやインターネットは「場所感の喪失」の過程をいっそう強化してきた。それでも人は特定の場所や文化の産物であり、その影響を受けとめながらローカルかつグローバルなコミュニケーション過程に参加していく。社会学科は、物理的には川崎のへんびな山の上にあるが、このようなコミュニケーションが展開される、脱一埋め込みされた場所、場所感なき場所でもある。その場所を、人々が差異をふまえながらもどのように作り上げていくか、ということは今後も私たちが考えていかななくてはならない宿題である。

最近、アメリカのある大学で、中国人の留学生同士が中国語で会話することを教員が禁止し、騒動になった。この事件の背景には複雑な事情があり、ここでは立ち入らないが、社会学科ではだれでも自由に母国語で会話ができる文化を大切にしていく必要があるだろう。社会学的な知は、多様性に裏打ちされた対話をつうじて生み出されるからだ。みなが同じ言葉を同じようにしか話せない世界で新しいアイデアは育てられない。今巻で、廣田先生のご業績を振り返るとともに、自由闊達な議論の成果をお伝えできることは編集担当にとっては大きな喜びである。執筆者の先生方、専修大学出版局で本巻を担当していただいた相川美紀氏にお礼申し上げます。

(社会学篇編集委員 秋吉美都)